

8 モデル校実践報告 [宮城県東松島高等学校]

(1) 実践概要

本校は、単位制・多部制の定時制高校である。発達障害や学習障害を有する生徒、あるいは診断されてはいないが、疑われる生徒が多数在籍している。また、不登校を経験している生徒も多い。不登校経験に由来するコミュニケーション能力に課題のある生徒や授業への期待と不安から精神的に落ち着かない生徒もいる。

発達障害や学習障害を有する生徒、またはそれらが疑われ、生徒自身の特性を理解する自己理解が困難な場合が多い。原因として、家庭の教育力の欠如や本人に対する保護者の無関心、保護者にも発達障害や学習障害、またはその疑いがあることなどが挙げられる。

そこで、本人による「困り感」表出の方法として、全生徒へアシストパック^{注1}を活用し実態把握を実施することにした。アシストパック導入により、生徒自身の振り返り・自己理解から具体的な支援に結びつけることが可能になる。特に、学習障害の面からアプローチを図り、学習面における「困り感」として客観的に提示（行動面における「困り感」とすると教員の主観と捉えられる可能性がある）し、本人・保護者とも受容しやすい状況を作る。教員側からの視点「特別な教育的支援を必要とする生徒調査（気になる生徒調査）」の結果とアシストパックをリンクさせ、生徒の「困り感」の把握に努める。把握した情報を教員間で共有し、生徒支援に活用する。

学習障害や発達障害に対する職員の理解度向上と、特性のある生徒だけではなく全ての生徒への学習支援を行い、共に学ぶ教育を目指す。特にユニバーサルデザイン（以下「UDL」という。）の視点を授業に取り入れる。UDLの視点とは、学力差や発達障害の有無にかかわらず、生徒全員が「わかる」「できる」よう工夫・配慮した授業を目指すことである。

^{注1} 生徒の自己理解を促すための一助となるための活用シート（宮城県総合教育センター作成）

(2) 平成30年度の取り組みの概要

重点的な取組内容	生徒情報の把握・共有・生徒支援への活用
成果	「特別な教育的支援を必要とする生徒調査(気になる生徒調査)」において、抽出した生徒の数が前年度と比較して増加した。教員の見立ての力がついたと考えられる。8月に実施した研修会（「学習障害の理解とその支援」講師櫻井育子氏）で学習障害と知的障害の違いを理解した。共に学ぶ教育の実現に向けた素地ができた。
次年度の課題	・アシストパック導入による生徒自身の振り返りや自己理解の伸長と、それを活用した具体的支援の実践。 ・UDLに関する実践的な研修や事例研究、または知的障害やその境界の生徒、学習障害のある生徒、アンダーアチーバーの可能性のある生徒の見極めと、それぞれに適切な支援の実践的な研修や事例研究。 ・特別支援教育、いじめ対策、教育相談担当による定例の「生徒情報共有の会」の設定と予防的ケース会議の積極的な開催。

(3) 令和元年度の取り組みの概要

重点的な 取組内容	(1)生徒情報の把握・共有・生徒支援への活用 (2)UDLに関する教員の知識・技能を高めつつ、併せて「UDL」マニュアルを作成する
成 果	(1)について 6名の教員からなる「支援チーム」を組織し、定期的に「生徒情報共有の会」を開催した。適宜ケース会議も開催し、効果的な支援ができた。 (2)について 「UDL」について校内研修を行った。先進校視察で得た情報をもとに、「ヒガマツ版UDLハンドブック」が完成し、次年度に運用していく。
次年度の 課題	・校内における共生社会の実現に向けて、障害のある者と障害のない者が可能な限り、共に学ぶ仕組みの構築を目指す。 ・特別支援教育の取り組みを担当分掌、担当係に限定させず、学校・教職員全体がそれを実践できるようになることを目指した校内体制の整備を推進する。本年度より実働した支援チームの構成メンバーについて、特定の分掌に固定せずに分掌横断で構成し、効果的な支援を継続することで、教職員全体の実践力向上に繋げる。 ・障害の有無に関わらず、すべての生徒が同じ教室で共に学べるよう、環境授業のユニバーサルデザイン化を推進する。「ヒガマツ版UDLハンドブック」を用い、令和2年度の具現化を目指す。 ・他者とのコミュニケーション活動の中で自己有用感に裏付けられた自尊感情を育み、自己の特性を肯定的に理解し、深い他者理解の視点を持たせる。アシストパックのさらなる効果的活用、ソーシャルスキルトレーニング（以下「SST」という。）活動の深化、校内掲示の工夫など、さまざまな手立てを組み合わせ、生徒のダイバーシティ対応能力を伸長する。

(4) 令和2年度の取り組み（まとめ）

重点的な 取組	(1) 生徒情報の把握・共有・生徒支援への活用 (2) UDLに基づく授業実践
指導目標に 対する主な 手立て	(1) 中学校訪問を行い、新入生全員の情報を収集し、在校生についても旧授業支援者（担任）から情報を引き継ぎ、全体で共有する。また、全生徒に「アシストパック」を実施し、「特別な教育的支援を必要とする生徒調査（気になる生徒調査）」とリンクさせ、効果的な支援を行う。 (2) 「ヒガマツ版UDLハンドブック」を活用し、授業実践を行う。特に重点目標として、「本時の目標を明示し、常に確認できるようにする。」と「本時の学習の成果を確認する。」を設定した。年3回、教員に対して「UDL取り組み状況調査」を行う。

<p>経 過</p>	<p>(1)について</p> <p>【4月】</p> <p>前年度末から4月にかけて中学校訪問を行い、4月7日に「生徒情報共有M（M＝ミーティング）」を行った。新型コロナウイルスの影響で、2か月間休校となっている期間に、「新入生相談シート」に基づき、保護者や生徒との面談を行った。</p> <p>【6月】</p> <p>学校再開後、昨年度から発足した生徒支援チームによる「生徒情報共有の会」を開始した。</p> <p>生徒全員に対し、「アシストパック」を実施した。教員に対し、「特別な教育的支援を必要とする生徒調査（気になる生徒調査）」を実施した。</p> <p>(2) について</p> <p>令和元年度2月の定例Mで、「ヒガマツ版UDLハンドブック」の活用と「UDL取り組み状況調査」の実施について、全職員の了承を得た。</p> <p>【4月】</p> <p>「新任・転任者ガイダンス」において、「ヒガマツ版UDLハンドブック」と「UDL取り組み状況調査」について説明した。</p> <p>【6月】</p> <p>学校再開まもなくではあったが、教員のUDLに対する意識を高めるために、「UDL取り組み状況調査」を行った。</p> <p>【10月】</p> <p>2回目の「UDL取り組み状況調査」を実施した。</p>
<p>成 果 と ま と め</p>	<p>(1)について</p> <p>「生徒情報共有M」では、特別な支援が必要な生徒の確認と共有を行い、特別な支援が必要な生徒への対応について年度初めの目線合わせができた。</p> <p>「新入生相談シート」に基づき面談を行い、困り感やどのような支援が必要か、本人・保護者と情報共有ができた。</p> <p>「アシストパック」と「特別な教育的支援を必要とする生徒調査（気になる生徒調査）」をリンクさせ、生徒の困り感を把握するとともに、生徒が困り感を感じていない生徒に対して、支援を模索することができた。</p> <p>(2)について</p> <p>6月に実施した「UDL取り組み状況調査」では、教員自身のこれまでの授業を振り返って、UDLに基づく授業とのギャップを認識することができた。</p> <p>10月に実施した「UDL取り組み状況調査」では、積極的に取り組んでいる項目がある一方で、6月の調査結果から後退してしまった項目もあった。</p>

その他	<p>生徒の困り感やどのような支援が必要になっているかを早期に把握する機会が増えたことや、誰にとっても分かりやすい授業に取り組んだ結果、「問題行動・不登校等月例報告」において、不登校生徒数が令和元年度と比べて11人減少した。（11月現在令和元年度33人，令和2年度22人）いじめの認知件数も前年比7件の減少だった。（11月現在令和元年度7件，令和2年度0件）</p> <p>UDLに基づく授業により，分かる授業が増えたために，自己有用感を味わったり，自己実現ができたのではないかと考えられる。UDLの取り組みは授業を変え，生徒を変え，学校全体の雰囲気を変える。「分かる授業」からもっと学んでみたいという学習意欲の高まりが，将来的な進路や生き方にまで影響するのではないだろうか。</p>
今後の課題	<p>3年間の「共に学ぶ教育推進モデル事業」が終わるが，この取り組みを継続することが必要である。また，特別支援教育に携わる，例えば教育相談担当や特別支援教育コーディネーターだけではなく，教職員全員が共に学ぶ教育に携わっていかねばならないという意識高揚も継続していかねばならない。</p> <p>人事異動による担当者の変更によって，「共に学ぶ教育」が途絶えないように，情報の共有・引き継ぎ・研修はこまめにしていかなければならない。</p> <p>「共に学ぶ教育推進モデル校」だけで終わらせる事業ではなく，この事業で得られた成果を他校に広め，全県で共に学ぶ教育が行われるような情報の伝播の仕方も考えていく必要がある。例えば，現在初任者研修で選択研修になっている「授業ユニバーサルデザイン研修会」を選択研修ではなく，初任者研修1年目の必修研修とし，UDLを教員ならば必ず知っておくべき事項にしていくべきだと考える。</p>

5 共に学ぶ教育推進モデル事業について

(1) ユニバーサルデザインによる授業づくり

UDLへの本格的な取り組みは，令和元年度にUDLについて校内研修を行ったところから始まった。学習障害や発達障害を有する生徒が板書をどのように見ているのか，掲示物や指示にどのような反応を示すのかを知ることは，とても有意義であり，UDLに取り組む上では必須の知識であった。また，その知識を踏まえ，本校においてどのように授業実践していくべきかを考える契機となった。

これまで一部の教員が実践するにとどまっていたUDLを全職員で実践し始めたのは，令和2年度からである。令和元年度末に作成した「ヒガマツ版UDLハンドブック」に基づく，全職員による取組である。転任者や新任者に対しても，この「ヒガマツ版UDLハンドブック」を提示し，UDLの実践をお願いした。

また，令和2年度後半から各教室にプロジェクターとスクリーン兼用黒板が設置されたこともUDLを実践する上では非常に効果があった。それまで二の足を踏んでいた教員もICT機器を使った授業を積極的に行うようになった。UDL=ICT機器を使った授業ではないが，ICT機器を使いこなせる教員が徐々に増えていくだろう。

令和元年度末に作成した「ヒガマツ版UDLハンドブック」は完成形ではない。今後もブラッシュアップしながら進化させていく必要がある。また、ヒガマツ版UDLハンドブック」を用いた研究授業や授業実践の共有を行い、UDLによる授業づくりを進化させていかなければならない。

今年度実施した「UDL取り組み状況調査」の結果と生徒による授業評価アンケートの結果は以下のとおりである。

ア 教員による「UDL取り組み状況調査」結果（重点目標について）

- ①「本時の目標を明示し、常に確認できるようにする。」
「取り組んでいる・だいたい取り組んでいる」6月87.1%→10月87.5%
- ②「本時の学習の成果を確認する。」
「取り組んでいる・だいたい取り組んでいる」6月71.0%→10月78.2%

イ 生徒による授業評価アンケートより

- ①「（先生は）授業の目標を伝え、常に確認できるか。」
「かなり当てはまる・やや当てはまる」7月93.0%→12月94.4%
- ②「（先生は）振り返りの時間をとっているか。」
「かなり当てはまる・やや当てはまる」7月85.5%→12月88.5%
- ③「授業は工夫されているか。」
「かなり当てはまる・やや当てはまる」7月94.5%→12月96.1%
- ④「（先生は）わかりやすい説明をしているか。」
「かなり当てはまる・やや当てはまる」7月93.8%→12月96.0%
- ⑤「授業でわかった・できたと感じるか。」
「かなり当てはまる・やや当てはまる」7月85.6%→12月89.3%

7月の結果より12月の結果が良くなっているのは、「UDL」による授業づくりだけが要因ではないと思うが、一定の成果が出ていると考えてよいのではないだろうか。